



Title	戦後西ドイツの「対抗的公共圏」：ハンブルクSDSの広報活動を中心に
Author(s)	田中，晶子
Citation	大阪大学，2009，博士論文
Version Type	
URL	<a href="https://hdl.handle.net/11094/49390">https://hdl.handle.net/11094/49390</a>
rights	
Note	著者からインターネット公開の許諾が得られていないため、論文の要旨のみを公開しています。全文のご利用をご希望の場合は、<a href="https://www.library.osaka-u.ac.jp/thesis/#closed">大阪大学の博士論文について</a>をご参照ください。

*The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA*

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

氏 名	田 中 晶 子
博士の専攻分野の名称	博 士 (文 学)
学 位 記 番 号	第 2 2 6 0 5 号
学 位 授 与 年 月 日	平成 21 年 3 月 24 日
学 位 授 与 の 要 件	学位規則第 4 条第 1 項該当 文学研究科文化形態論専攻
学 位 論 文 名	戦後西ドイツの「対抗的公共圏」ーハンブルク SDS の広報活動を中心にー
論 文 審 査 委 員	(主査) 教 授 竹 中 亨 (副査) 教 授 藤 川 隆 男 准教授 中野耕太郎

## 論 文 内 容 の 要 旨

本論文は、1960 年代末の「議会外反対勢力」(A P O) 運動期に成立した「対抗的公共圏」の具体的なメディア実践を、地域レベルにおける A P O 運動の具体的展開に即して考察することを通じて、「対抗的公共圏」から、その次に生起する「オルタナティヴ公共圏」が形成されていく過程を解明するものである。

このテーマについては、従来 3 つの角度からアプローチされてきた。思想史的方法、メディア学/コミュニケーション学的方法、「長期の 60 年代論」的視角の三つである。しかし、いずれも、社会運動の展開のなかでのメディア実践の具体相において問題を捉えることには成功していない。そこで、本論文では、ハンブルクという一都市における社会主義学生同盟 (S D S) という個別の社会運動を取りあげ、その広報活動を実証的に分析するという方法をとる。

本論文は、まず第一章で、以上のごとく、研究史の整理と問題設定を行った後、第二章で、前史として、当該期以前の S D S の広報活動を紹介する。それをふまえて、第三章以降の分析に入る。まず取り上げられるのが「反シュプリンガー・キャンペーン」であり、S D S による新聞の新設が紹介される。巨大メディアであるシュプリンガー社は、西ドイツ既成体制の一つの象徴であった。社会運動のなかで発刊された諸新聞に見られる新奇性を指摘しながら、筆者は「対抗的公共圏」の形成を跡づけていく。次に第四章では、A P O 運動期が頂点を越えた後、「対抗的公共圏」にどのような変容が生じたかを、S D S の変貌と合わせて叙述する。運動の先鋭化・分裂とともに、急進派が広報活動において主導権

をとって支配的にになっていくのである。そして、1970 年代に入ると、A P O 運動は決定的に退潮していき、それに代わって「オルタナティヴ公共圏」が生まれてくる。第五章はその経緯を紹介し、次の時代を展望して稿を閉じる。

## 論 文 審 査 の 結 果 の 要 旨

1960 年代末からの、いわゆる学生運動は、大きな現代史的意義をもつにもかかわらず、歴史研究ではまだ十分に取りあげられていない。これはドイツ史研究についても当てはまることである。

その意味で、本論文は未開拓の分野に鉾を入れたパイオニア的業績として、まず高く評価されるものである。メディア実践や公共圏の変容という社会学的観点そのものは、これまで多くの論議があるが、それを社会運動に実証的にリンクさせるという視角は、たいへん斬新である。これによって、従来の研究が逢着していた限界が乗り越えられ、新たな地平が拓かれたのである。この概念枠組は、潜在的な発見性が高く、今後の研究の進展に大いなる刺激を与えるものと期待される。方法的に見ても、本論文は高い評価に値する。個別の社会運動の展開に即して、徹底した地域史の実証の方法をとったことで、事象的経緯を確定したうえで、冷静な分析を行うことができるようになったからである。こうした長所をもつ本論文は、今後のドイツの学生運動史の礎石となるものと言えよう。

他方で、問題が若干あることは指摘しておく必要がある。まず、ハンブルクという一地域に論述が集中しており、その事例が他の西ドイツの諸地域にどれほど当てはまるのかという点が明らかではない。学生運動は、ドイツのみならず、全世界的にも同時発生的だっただけに、ケーススタディを越える全般的視野は重要である。また、メディア実践や公共圏という概念のもつ内容が、まだ完全に煮詰められていない。一学生運動組織の盛衰、その組織の刊行した諸新聞の論調・特質を紹介するなかで、そこからどのような一般的な結論が引き出せるのかを、もう少し大胆に明示してもよかったろう。

しかし、パイオニア的業績には、細かな瑕疵はつきものである。そうした瑕疵は、論文全体の意義を決して損なうものではない。むしろ、今後の研究を刺激する問題提起として、肯定的に評価すべきものと考えてる。本論文は、今の歴史学界に多大の貢献をなすものであり、よって、本論文を博士 (文学) の学位を授与するに十分な価値を有するものと認定する。